

図 8 活動銀河 TOLOLO 74 の中心核近傍での輝線線輪郭の空間変化。

は新しい疑問を生みだしてきている。

CASPEC の CCD 画像の解析は、ESO の画像処理システム MIDAS で行なう。解析用ソフトは、IUE のエシエル解析ソフトを作った専任のプログラマーがほぼ一年がかりで開発したものである。VAX 11/780 と画像プロセッサ IP 8500、画像表示装置 De Anza を主にしたシステムで、対話型処理により、解析を進める。主なプロセスとしては、CCD 画像の背景パターン（読み出しノイズと転送効率向上のための前露光成分、それに若干の暗電流成分）の除去、較正用フラット・フィールド画像による各オーダーの位置決定、トリウムランプ画像による波長較正、CCD 感度ムラの補正、オーダーごとのスペクトル測定、エシエルのブレイズ関数の補正、全オーダーをつなげて一次元スペクトル化、などがある。一枚のエシエログラムのここまでの解析にほぼ一日かかる。このあとは、普通のスペクトルの解析法とほぼ共通である。

7. あとがき

観測天文学がビッグサイエンスとなった今日、国際機関としての豊かな経済力を背景に、野心的な計画に向けて着実に歩を進めている ESO の姿勢は、大変心強い。

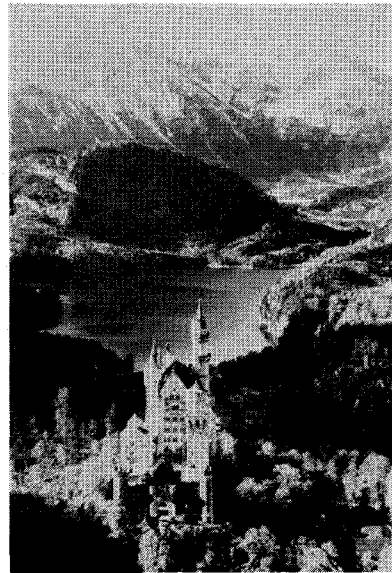


図 9 ミュンヘン郊外のノイシュバンシュタイン城

CASPEC の他にも OPTOPUS（多天体同時分光器）、EFOSC（微光天体分光器）などユニークな装置が続々と開発されている。若手を指導する大物学者が少ないこととか、終身スタッフが少ないため長期計画の実行がやや難しいなどの問題はあるようだが、欧州の観測天文学の中核としての機能は、これからますます充実するものと思われる。バイエルン州の美しい都ミュンヘンは、ビールと芸術・文化だけでなく天文・宇宙科学の面からも魅力的な町である（図 9）。いつか是非再訪したいと思っている。

最後になったが、ESO 非加盟国からの筆者を招いて下さった L. Woltjer 台長、G. Setti 科学部長に感謝する次第である。また CASPEC 立ち上げに参画させてくれた S. D'Odorico 博士、観測共同提案者 M. H. Ulrich 博士、解析に際しいろんなソフトウェア改造の要望に終始忍耐強く応えてくれた D. Ponz 氏にも心からお礼申し上げたい。

日本天文学会 1984 年度秋季年会記事

1984 年秋季年会は広島県竹原市の市民館において、A, B 2 会場で開催された。期間は 10 月 17 日（木）～19 日（金）であった。講演数は、会場 A 92、会場 B 94、計 186、出席者数約 270 名で、各セッションの座長は次の方々をお願いした。

	会場 A	会場 B
17 日 午前	成 相 秀 一	土 佐 誠
	会 津 晃	海 部 宣 男
午後	藤 本 光 昭	辻 隆
	池 内 了	北 村 正 利
18 日 午前	石 田 蕙 一	海 野 和 三 郎

	堀 源 一 郎	中 野 武 宣
午後	横 山 紘 一	川 口 市 郎
	若 生 康 二 郎	甲 斐 敬 造
19 日 午前	古 在 由 秀	高 倉 達 雄
	田 原 博 人	杉 本 大 一 郎
午後	赤 羽 賢 司	富 松 彰

会期中、17 日昼に内地留学奨学金選考委員会、18 日昼に臨時評議員会、夜に懇親会、19 日昼に理事会が開かれた。なお今回の年会開催については、竹原市及び市教育委員会からのご後援を頂いた。